

うだ。

I have a 75 watt, glare free, long life

Harmony House light bulb in my toilet.

それに対して、ジャパニース・バージョン「友なる電球」（高橋源一郎訳）の出だしは、「まご／＼便所についているのは、75ワット、眩しく輝き、長持ちするハーモニーハウス社の電球である」となっている。

この和訳の二行目が、4。どうやら、訳者はfreeという単語で足を滑らしたらしい。カタカナで考えると「フリー」イコール「自由」束縛を受けない「無所属」、また「無料」の意味もあるが、英語のfreeはさらに幅広い。「固定していない」とか、スケジュールが空いているとか……それから、接尾語みたいに名詞のあとにつくと、「無し」「抜き」「使っていない」「含まれていない」となる。従ってsugar-freeは「無糖」、salt-freeなら「無塩」、tax-freeときたら「非課税」、そして日本語になつていふものでいうとbarrier free — 障害物（バリア）無し（フリー）だ。

ちと昔の詩のglare freeも同類のフリー。要するにglare（眩しさ）を取り除いた「艶消し」の電球である。製造元のハーモニー・ハウス社は、眩しくないように加工して、そのソフトな光をセールスポイントにしている。いや、ホントのことをいふと、75 watt, glare free, long life / Harmony Houseのくんだり全部、トイレの電球に印刷されてある言葉をつくりそのままだ。プロライターはそれを引っぱつてきて、詩に使った。

となればlong lifeも、簡単に「長持ちする」と観念するにはいけない。あくまでメーカー側の言い分だ。原文では一目瞭然なので、やはり日本語でも、「能書き」の引用と分かるようにしなければ、④偽りあり。

原文と和訳の下に、生徒への指示も、もつともらしく載つていた。「身の回りの人やものをよく見つめ、英語で表現してみましょう。上の英語の詩や、その日本語訳を参考にしましょう」

それを讀んで、ぼくは「参考にする訳についても、6」と、指示をもう一つ加えるよう編集者に提案したが、どうなったことやら。「文部省検定済」だったし……。

教科書のみならず、例えば「世界文学大系」の中の、押しも押されぬ「名詩集」にも、眩しい誤訳が載っている。六百ページもあるこの日本語訳だけの大冊は、数年前からわが家の本棚にでんと座っているが、いまだに読了できていない。なまに手に取つて、ギリシア詞集の章をばらばら見たり、ゲーテの「酌人の書」をちびちび読んだりして、また本棚へ戻す。

最後のほうに二十世紀のアメリカの詩も載っているが、いつかオレックス・ステイヴンズの章を聞いてみたら、「お茶の時間」というタイトルが目についた。そういえば、ぼくの好きなステイヴンズの詩に、Teaと題したのがあった。あれは短い作品だつたけれど、この「お茶の時間」（福田隆太郎訳）もたった八行。同じかも……と思つて読み出すと、おやッ、なんじやこりゃ？ ぼくの記憶の中のTeaとたいたい重なるものの、それでもまったくの別天地だ。訳というよりもお化けバージョンか。

原作は映像的⑤、カメラアイが低いアングルで寒い公園をうつしてから、暖かい室内へと移動、明かりの下でぬくぬくしたクッションにズームインして、紅茶を飲む男女二人を画面に出さずに、間接的に艶っぽく描く。巧みな比喩は、読者のイメージネーションをくすぐるけれど、表現される世界は全て日常の範囲内だ。それに引き替え、日本語訳のほうはいきなりファンタジーへと飛び立ち、帰つてこようとしな。それぞれの出だしは次の通り。

When the elephant's ear in the park

Shrivelled in frost

公園の象の耳が

霜でちぢまつたとき

大衆のベゴニアのことを、英語ではelephant's earと呼ぶ。その葉がどことなく象の耳に似ているからだ。アメリカなら、そこらへんの公園にあつてもおかしくない植物だし、霜で少し萎む（Shrivel）ことも十分あり得る。でもホンモノの象が